多文化共生のために地域の劇場ができること
—ベルリン・クロイツベルク Ballhaus Naunynstrasse を事例に—

伊藤 麻未[1]

はじめに

今回、1ヶ月のベルリン滞在の中で、筆者は主に“post-immigrant”をテーマとする劇場バルハウス Ballhaus Naunynstrasse とその周辺地域クロイツベルク Kreuzberg（特に Kottbusser Tor Bhf.から Görlitzer Bhf.の間あたり）について調査をした。おそらく日本で一番有名なトルコ系ドイツ人の映画監督である Fatih Akin の作品のように、トランスカルチュアルな文化やアートに、社会を変える力があるのかを検証することが目的であった。アートに、トルコ人とドイツ人の相互理解の促進や、2世に多いと言われるアイデンティティ・クライシスからの解放の可能性を求めることができるだろうか、という疑問を念頭においている。

これまでの日本で入手できる多くのトルコ系ドイツ人に関する先行研究では、「一面でドイツ社会に順応し、親の価値観に抵抗を感じてきた子どもには、『ドイツ人にもなれない。といってもトルコ人にも戻れない』という状態に陥る。つまり自分の身を置ける居心地の良い場所を見つけることができなくなる[2]」、「トルコ人にもドイツ人にもなりきれず、自分はいったい何なのかとアイデンティティの葛藤に苦しむ[3]」と、ドイツ社会との関係を悲観するものや、ドイツとトルコという二つの文化の狭間に立たされることをマイナスと捉えているものが多かった。または、「文化的には同化したとしても、社会的、経済的に社会の底辺に位置づけられていることが、彼ら若い移民たちにホスト社会への不満と反発を引き起こしている。その反発の力が、しばしばイスラムの覚醒をもたらすのである[4]」というように、イスラムへの傾倒も指摘されている。このように、トルコとドイツの二つの文化を持つことをプラスに考えることが少なかった。

しかし、そのようなトランスカルチュラルなアイデンティティだからこそ作り出せる新たな表現があり、そして、そのような異文化が混交したアート・文化が、社会をより開かれたものに変容させていくと、プラスに考えることができないだろうか。トルコ人とドイツ人との関係性が、異なる文化を持つ者同士がどのように関係を築いていくべきかを示す指標にもなり得るかもしれない。そのようなアート・文化の可能性を求めて、バルハウスとクロイツベルク、つまりそこに暮らす人々との関係性について検証する。

1. トルコ系ドイツ人の起源

初めに、なぜドイツに多くのトルコ系の人々が渡ってきたのかを簡単に説明する。2003年時点で、ドイツ全体に260万[5]と、ドイツ最大のエスニック・マイノリティである彼らは、約50年前の旧西ドイツによる経済復興のための労働力確保政策に起因する。トルコとは1961年に結ばれ、雇用期間後の帰国、単身であることが原則であった。トルコ側も、人口増加による余剰労働力の受け入れ先を必要としていたため、両者の利益が一致した。実際、彼らの労働力はドイツの経済の奇跡に貢献する。

しかし、60年代後半の一時的な不況や、70年代のオイルショックなどにより、歓迎されていた外国人労働者が疎ましい存在として受け止められるようになる。母国への帰国を促すが、ドイツの充実した社会保障を選ぶ者が多く、むしろ家族呼び寄せを引き起こした。

こうして、トルコ人は外国人労働者から移民へと変容したのである。

2. クロイツベルク

場所は、ベルリン最大のトルコ系居住区であるクロイツベルク。ケバブスタンドから、トルコのCD屋、楽器屋、旅行代理店、ムスリム用食料品店、喫茶店、モスクなど、トルコ人が生活に必要なものは全てここで揃うほどで、“リトル・イスタンブール”とも呼ばれる。人口の20%から30%が外国人である。低所得者が多く、「トルコ人ゲットー」という印象が強いため、一人で歩くことは危険かと思いきや、かなり賑やかで、トルコ系の店以外にも、若者に受けそうなおしゃれな店が多く、ゲットーというイメージとはかけ離れた印象であった。

U-Bahn（地下鉄）のKottbusser Tor Bhf.を出て、Adalbertstrasseを旧東ベルリン方面に数分歩くと、Oranienstrasseという特に賑やかな通りに出る。この通りには、飲食店が多く、トルコ系のレストランや、小さな喫茶店以外にも、日本食やインド料理などもある。また、ちょっと変わった書店、雑貨屋、洋服屋なども多い。旧西ベルリンの東側、まさに壁際にある地区――結果的に、現在はベルリンの中心――であり、戦前から残っている老朽化した低家賃の住居が多く、アーティストや学生などが多く居住するようになったためだ。

昼間に歩いて印象的なのは、喫茶店の外の席で、何をするでもなくチャイを飲んでいるおじさん達の姿であった。そして、通りすがりの人々も知り合いであることが多いらしく、一言、二言話しては去っていくという光景を何度か見た。一番驚いたのは、運転中に車から顔を出して、喫茶店に座っている人と大声で会話している光景だ。みな周辺地域に住んでおり、ここを中心に生活しているのだということが非常に強く感じられた。ゲットーという言葉から連想するアメリカのアフリカ系のヒップホップのように、自分のストリートだという意識の表れのように思える。トルコ系の若者の間でヒップホップが流行っていることも偶然ではないのかもしれない。

Oranienstrasseには、Ertugrul Gazi Camiiというアパートの部屋を改装したモスクがある。また、さらに通りを東に進むと、Görlitzer Bhf.があり、目の前に大きなアラビア系のモスクがある。外観はシンプルで、モスクと気づきにくいが、トルコ系のアパートのモスクとは違い、中はかなり豪華である。そして、そのモスクの何軒か隣のアパートにまた、Turkisch-Islamische Union der Anstalt für Religion e.V.というモスクがある。クロイツベルクには約15のモスクがあるらしい。ちなみに、ノイケルンには、Shehitlik Moscheeという青を基調とした立派なモスクがあるが、2004年頃につくられたもので、この規模はベルリンのトルコ系モスクとしては唯一のものである。これらのモスクは、ただの祈りの場だけではなく、人が集まる交流の場ともなっているらしく、祈りの時間以外は、年配の男性が、チャイを飲みながら、新聞を読んだり、談笑している姿が見られた。また、女性のためにコーラン教室や、悩み相談ための情報も発信している。

3. Ballhaus Naunynstrasse

肝心のバルハウスはどこにあるかと言うと、Oranienstrasseよりもひとつ北東、旧東ベルリン側のNaunynstrasseという通りにある。Ballhausの正面には、若者向けの文化センターもある。Oranienstrasseと比べると、静かな商住混在地区である。

筆者はここで、9月17日、18日に、映画の部門に携わっているOsaman Tok氏、映画監督のSinan Akkus氏、俳優のTim Seyfi氏にインタビューを行った。これらのインタビューや、Osman氏からいただいた資料、筆者の実感などを含め、この劇場と地域社会

との関係性を検証しようと思う。

この劇場は 2008 年に、映画監督 Fatih Akin の援助により、トルコ系 2 世の女性である Shermin Langhoff 氏がオープンした。フリードリッヒスハイン・クロイツベルク区の自治体が管轄する施設であり、NPO が運営を担っている[6]。トルコ系やアラブ系の多いクロイツベルク地区にあるため、結果的にトルコ系を主題にした作品を多く上演しているが、トルコ系に特化した劇場ではなく、"International Institution"と名乗っている。実際に、スタッフの出身地は、ドイツ、トルコ、イラン、ブラジル、フィリピンと多様である[7]。

3.1 アーティストのための劇場

この劇場の大きなテーマは"post-immigrant"であり、Osman 氏によると、ドイツ人がトルコ人を社会的弱者と見なす視点を避け、ドイツ社会の一部であることを示すことが目的である。また、ドイツ人がトルコ人について語るようなことを避け、自分たちは工場で何かを作るのではなく、アートを創るのだと示すことも目的としている。つまり、アーティストたちが、「トルコ人アーティスト」としてではなく、「アーティスト」一般として自己形成できるような場を提供していると言える。以前は、ドイツ社会でアーティストとしてやっていくためには、自身の名前をドイツ風に変えることで差別に耐える者が多かったが、ここではありのままの自分でいることが保証されるのだ[8]。

その例として、演劇"Crazy Blood"というベストシアタープレイとして選ばれた作品がある。ディレクターである Nurkan Erpulat はトルコ生まれのトルコ人であるが、この作品をドイツの劇場に売り込みにいったところ、全て断られ、唯一受け入れたのがバルハウスであった。ドイツの学校の教室が舞台であり、ステレオタイプなトルコ系の生徒達がでてくるという内容のものだ。多くの劇場で断られた理由が、差別的なものであったか、それともステレオタイプな表現にドイツ側がやりにくさを感じたのか、はっきりはわからない。しかし、これまで表現の場を得ることができなかったアーティストに対して、バルハウスが機会を与えていることは確かである。多くのアーティストにとって、活躍のためのステップとなり、発信力をもったプラットフォームとしての機能を果たしている。

3.2 地域のための劇場

館長の Shermin Langhoff 氏のインタビュー記事によると、バルハウスは「トルコ系やアラブ系の多い近隣地域によく根付きながらも、街全体に文化的影響力をもたらせる劇場になる[9]」という他のドイツの劇場がなし得なかったことに成功したと言われている。「トルコ系やアラブ系の多い近隣地域によく根付き[10]」ということが、クロイツベルク出身のトルコ系、アラブ系の俳優を多く起用しているということであれば、確かに当てはまるかもしれない。しかし、観客については、必ずしもトルコ系、アラブ系の人々を惹き付けられているとは言えない状況である。

筆者は合計 5 つの演目に参加した。文学の講演会"Vibrationshintergrund"（9/12）、演劇"Der Besuch"（9/14）、映画 "Min Dit-Die Kinder von Diyarmakir"（9/17）、映画"Evet, Ich Will!"（9/18）、イベント"Kahvehane Reloaded"（9/22）である。トルコ系など、移民をバックグラウンドとする人が観客として来ていたのは、"Min Dit-Die Kinder von Diyarmakir"、"Evet, Ich Will!"の映画のみであった。"Min Dit-Die Kinder von Diyarmakir"の方は、トルコにおけるクルド人についてのシリアスな内容であったが、クルド人の女性が一人だけ来ており、コメディー映画である"Evet, Ich Will!"には、何人か移民をバックグラウンドとする人々が来ていた。「移民の 2 世や 3 世はいまだ演劇よりも、アート、音楽、映画に惹かれがちである[11]」

という言葉が、まさにこの状況を物語っている。

Osman 氏もインタビューで、観客のほとんどがドイツ人の教養層であると語っている。これは他の劇場にも言えることで、やはり労働者階級や、高い教育を受けていない人々、つまり多くのトルコ系の人々が劇場に足を運ぶことは稀である[12]。一方で、この劇場は、他の劇場では見ることの出来ない多様な客層を持つ、と Shermin 氏は語り、また、「クロイツベルクのおしゃれな地区や、シュテグリッツやシャルロッテンブルクのような地域に住むトルコ系の中流階級からも惹き付けている[13]」とも述べている。つまり、トルコ系といっても、経済的・社会的に上昇を果たせたような人々のみが、訪れるような劇場と言える。同じ劇場で働く 2 人からの異なった見解を受け、混乱させられるが、これは劇場内で同じ問題意識を共有していないことによる混乱をまさに反映しているのかもしれない。

3.3 地域と関わるために—広報・宣伝活動、ワークショップ

それでは、クロイツベルクという地域と関わっていくためにどのような努力をしているのかを、広報・宣伝活動、そしてワークショップなどを事例に考えてみる。まず、広報・宣伝についてだが、クロイツベルク地区では存在感を示すためポスターで、その他の地区へはホームページ上で情報発信をしている。というのも、興味のある人は、放っておいても自分で情報を得てやって来るからである[14]。また、目の前に若者の文化センターがあるため、「他の新しい劇場と違い、地域の若者とつながりを持つために、そこまでの努力をしなくてもいい[15]」という考えも持っている。この文化センターでは、独学で学ぶ者に、映画の作り方を教えており、彼らが作った作品をバルハウスで上演をしており、もともと若者とのつながりを持っているという認識からだ。

これらの考えから、興味のある人のみに来てもらえばいいという印象がうかがえる。ポスターによりクロイツベルクでの存在感はかなりあるようで、実際にクロイツベルクで会話をした多くの人々は、バルハウスの場所をしっかりと認識していた。しかし、実際に劇場まで足を運んだことがあるのはかなり少数だろう。バルハウスの宣伝・広告に対する考え方では、結局は映画作りやアートにもともと興味を持つ人々にしかアプローチできていないと考えられ、どのように無関心な層を取り込むかということまでは考えられていないことがわかる。

次にニューヨークでも上演されたトルコ系 1 世、2 世、3 世と世代別に行われた演劇のワークショップについて、特に 3 世のもの(“Ferienlager–The 3rd Generation”)に焦点を当てながら紹介する。まず、1 世だが、ワークショップに参加した者は、トルコ生まれの 60 代、70 代である。彼らはトルコやドイツでプロとして演劇をやってきたため、ドイツ語を流暢に話せる者が多い。次に、2 世だが、彼らはドイツ生まれ、または幼い頃に 1 世とともにドイツへ渡った人であり、40 代である。矛盾するような 2 つの文化に挟まれ、どのように自分の道を見つけていくのか、ということがテーマとなっている。最後に 3 世だが、彼らはドイツ生まれの 10 代、20 代であり、アマチュアで演劇の経験のない者が採用された。クロイツベルク出身の女子高校生 2 人が参加し、クロイツベルクで生活する上での衝突や矛盾、自分がどこに所属するのか、社会における自分の位置をどう捉えるかということ、歌や武道など自分の興味を表現した[16]。

これらのワークショップも、結局は興味がある者しか参加することはないという課題はあるものの、トルコ系の若者たちが自分のアイデンティティについて肯定的に捉え、ト

ルコ系ドイツ人であるということに起因するフラストレーションから少しでも解放される機会を与えていると考えられる。彼らのアイデンティティが変化したかは計り知れるものではないが、ニューヨークという場で表現できる機会を得たことは、彼らにとって大きな自信となっただろう。

まとめ・今後の発展

以上のように、バルハウスには他の劇場と同様、無関心の層をどのように取り込むかということに関しては、まだまだ努力する余地があると言える。筆者が実際に見てきた状況、そして Osman 氏の認識としても、ほとんどの観客がドイツ人の教養層であったこと、トルコ系の観客の場合であっても、中流階級や、演劇や映画、アートに興味のある者しか惹き付けられていないことが現状である。そして、その現状を改善の余地ありとみなす Osman 氏と、インタビュー記事上では、すでに多様な観客を得られていると考えている Shermin 氏で、捉え方が異なることも気になる点である。

このような状況下で、果たしてバルハウスに社会を劇的に変える影響力があるのだろうか。答えは、Osman 氏の言葉を借りると、この劇場は“salt in soup”であり、少しずつしか社会を変えることができない。なぜなら、社会を変えるには、普段劇場へ足を運ばないような人、言葉は悪いかもしれないが、トルコ人もドイツ人も含め、あまり教養のない人や、外国人嫌いの人に来てもらわなければ、彼らの考えや価値観を変えることはできないからである。もともと劇場に来るような、高い教育を受け、比較的オープンマインドなドイツ人の価値観を変えるより、普段劇場に来ないような人々の価値観を変えた方が、社会に対して影響力を持てるという考えだ[17]。

この状況下では社会を変えることは難しいと Osman 氏は認識しているが、ではどのような方法論でこの現状を打開するつもりなのかという質問に対しては、明確な返答はなかった。そこに、どことなく諦めを筆者は感じた。もしくは、観客層はともかく、うまく運営ができているこの状況を、危機感や緊急感を持って打開していく必要性を感じていないというのが本当のところなのかもしれない。一方で、映画や音楽、アートに惹かれがちな移民系 2 世、3 世を演劇に惹き付けられない状況を変えられると信じながらも、「残念ながら、私たちにできることは演劇であり、革命ではない[18]」とも Shermin 氏は述べており、希望と諦めが混在している印象を受ける。

しかし、ここからアーティストたちが様々な思いをもって発信している文化はとても魅力的であり、社会に影響をもたらせるほどの力があるのではないかと個人的には考えている。俳優の Tim Seyfi 氏は、映画を通して様々なトルコ人の姿を表現して見せたいと考えており、作品を通して、少しでも相互理解、融合を進められると信じている[19]。例えば、ドイツ人がトルコ人の文化や、自分の文化との差異を知ることによって、自分の価値観からだけでなく、相手の立場に立って考えることができるかもしれない。また、映画監督の Sinan Akkus 氏は、トルコ人が映画を見て、トルコ人も映画を作ることができるとトルコ人であることを誇りに思ってくれたら[20]、と考えている。つまり、アイデンティティを肯定的に捉えることを示している。そして最後に、自らを “Citizen of the world” と考える Fatih Akin や、DJ Ipek のようなトルコとドイツの要素を混合したアートや文化は、これまでの先行研究が示すアイデンティティ・クライシスや、イスラムへの傾倒とは異なったアイデンティティ形成の可能性を示している。

また、この劇場をきっかけに活躍の場を得たアーティストや、自身のアイデンティティについて考え直す機会を得た者もいること

も忘れず評価しなければならない。ただ、これらの実績を、限られた人々だけでなく、地域の人々も巻き込んで享受してもらう方法を考えていくことが課題だろう。上に挙げたようなアーティストの思いが実現されるためにも、重要なことである。初めに「トランスカルチュラルな文化やアートに社会を変える力があるのか」という問いを挙げたが、現段階ではそのような力があったとしても、届くべき人に届いていないというのが現状だ。

ここで、最後にこの現状を打開するための一つの事例として、外国人比率が3割というハンブルグのアルトナ地区にある青少年を対象にした社会文化センター、モッテMOTTEが立ち上げた「アルトナーレ」という多文化共生フェスティバルを挙げる。現在では、「アルトナーレ」は多様なアクターを巻き込みながら、拡大している。例えば、音楽学校や合気道教室などの組織から、様々な個人、企業が非営利の有限責任会社を組織し、資金面や意思決定の面で関わっている[21]。劇場の中に閉じこもりがちなバルハウスとは異なり、街に飛び出していることが特徴である。街が芸術の展示会場となり、また朗読会、演劇、仮装パレードなどが街で繰り広げられ、フリーマーケットや出店ブースなどで賑わう[22]。このフェスティバルは、これまでなかった様々な人々が集まる場となり、会期中でなくとも、街中でのアート・パフォーマンスや露店が見られようになった。ドイツ人と外国人が直接関わり合うことが少ないベルリンとは異なり、普段でも様々な民族的・言語的・文化的な背景を持った市民が混交している状況が生まれているようだ。「アルトナーレ」は単に一過性のフェスティバルではなく、「多文化共生こそが地域アイデンティティーの源泉[23]」なのだという意識を地域住民に根付かせるきっかけを与えた。今回の調査研究では、ハンブルグまで足を延ばすことができなかったが、バルハウスが抱える課題の解決のヒントとして、今後調べてみる必要があると考えている。

---

1 神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻芸術文化論 博士前期課程。
2 内藤正典（1995）『トルコ人のヨーロッパ：共生と排斥の多民族社会』明石書店、p.206。
3 野中恵子（1993）『ドイツの中のトルコ：移民社会の証言』拓殖書房、p.121。
4 内藤正典（1996）『アッラーのヨーロッパ 移民とイスラム復興』東京大学出版会、p.190。
5 内藤正典（2004）『ヨーロッパとイスラーム』岩波書店、p.24。
6 Ballhaus Naunynstrasse http://www.ballhausnaunynstrasse.de/HAUS.8.0.html （2011年12月31日閲覧）
7 2011年9月17日 Osaman Tok氏とのインタビューより。
8 同上。
9 Peters, N. 2009. “Turkish delights“ in *Stuttgarter Zainung*.
10 Ibid.
11 Ibid.
12 2011年9月17日、Osman Tok氏とのインタビューから。
13 Peters, op.cit.
14 2011年9月17日、Osman Tok氏とのインタビューから。
15 Peters, op.cit.
16 Osman氏から頂いた資料“This is about you kids!“ Translation from German 19 May 2009 www.taz.de.
17 2011年9月17日、Osman Tok氏とのインタビューから。
18 Peters, op.cit.
19 2011年9月18日、Tim Seyfi氏とのインタビューから。
20 2011年9月18日、Sinan Akkus氏とのインタビューから。
21 Altonale 14 Gesellschfter http://www.altonale.de/die-altonale/Gesellschafter.html （2012年1月1日閲覧）。

[22] 谷和明（2007）「よみがえる街と人々―ドイツ・ハンブルクの“市民祭”」
http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/tokyotama/feature/hachioji1270461519020_02/news/20100405-OYT8T00973.htm『読売新聞』2007年9月8日（2011年12月31日閲覧）。
[23] 藤野一夫（2006）「市民が支える公共圏を」『神戸新聞』2006年7月31日。

◆参考文献

Peters, N. 2009. “Turkish delights“ in *Stuttgarter Zainung*.

内藤正典（1995）『トルコ人のヨーロッパ：共生と排斥の多民族社会』明石書店

――――（1996）『アッラーのヨーロッパ　移民とイスラム復興』東京大学出版会

――――（2004）『ヨーロッパとイスラーム』岩波書店

野中恵子（1993）『ドイツの中のトルコ：移民社会の証言』拓殖書房

藤野一夫（2006）「市民が支える公共圏を」『神戸新聞』2006年7月31日

◆参考ウェブサイト

Altonale 14 Gesellschfter http://www.altonale.de/die-altonale/Gesellschafter.html

“This is about you kids!“ Translation from German 19 May 2009 www.taz.de

谷和明（2007）「よみがえる街と人々―ドイツ・ハンブルクの“市民祭”」
http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/tokyotama/feature/hachioji1270461519020_02/news/20100405-OYT8T00973.htm 『読売新聞』2007年9月8日